**★テクスト**

( )内の数字は、Henri Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, Quadrige/ PUF, 2008の頁。（従来の邦訳に付記のものとはずれています。）

(A)「要するに、社会的責務の根底に見出された社会的本能は、常に、どんなにそれが広かろうとも、閉じた社会を目指すものである。〔…〕それは、人類l’humanitéを目指すものではない。どんな大国であれ、国民・国家nationと人類との間には、有限le finiと無際限l’indéfini、閉じたものと開いたものとの間の距離の全体がある。」(27)

(B)「今日でも、私たちは自然に、また直接に私たちの親や同国人を愛する。しかるに人類愛l’amour de l’humanitéは、間接的であり獲得されたものである。前者には私たちは直通で行けるが、後者には、ある回り道をしないとたどり着かない。というのも、宗教が人間に、人間という種全体を愛するよう招くとすればそれはただ神をとおして、神においてなのだから。また同様に、哲学者たちが、人格の卓越した尊厳、万人が有する尊敬respectされる権利について、私たちに教え示すべく、人類というものに目を向けさせるのは、やはり、私たち皆がそれによって共同性を得ているところの〈理性Raison〉をとおして、〈理性Raison〉においてのみのことである。どちらの場合も、私たちは人類にまでは、家族や国家といった段階を追ってたどり着くことはない。一挙に、人類よりもっと遠くまで運ばれるのでなければならない。こうして私たちは、人類を終点として捉えるのではなく、人類を越えて行くことで、人類に到達しているのである。さらに、宗教の言葉に拠ろうと哲学の言葉に拠ろうと、愛であろうと尊敬であろうと、これは、社会的圧力la pression socialeのさらに上にかぶさってくる別の道徳un autre morale、別の種類の責務である。」(28-29)

(C)「どの時代にも、この完全な道徳が受肉したs’incarnait特別な人々が現れた。キリスト教の聖人たち以前にも、人類はギリシアの賢人たち、イスラエルの預言者たち、仏教の阿羅漢たち、などなどを知っている。この完全な道徳cette moralité complète、むしろ絶対道徳と呼んだ用がよいだろうものを得るためには、人々はつねにこうした人々を手本としたのだった。このこと自体が、すでに注目すべき事実であり示唆するところが大きい。このこと自体が、これまで問題としてきた〔閉じた・静的〕道徳とこれから検討しようとしている〔開いた・動的〕道徳との間にある、つまり極小と極大、両極端の間の、たんに程度の差ではない質的な相違について予感させてくれる。前者は、非人格的な諸定式formules impersonellesに引き戻されればそれだけ純粋で完全となるのに対して、後者は、それが十全なものとなるには、一人の模範となる特権的な人物に受肉するのでなければならない。前者のもつ普遍性は、なんらかの法loiが一般的に受け入れられていることに依拠している。後者のそれは、ひとりの模範を皆が倣び従うことla commune imitation d’un modèleに依拠している。

　聖人たちはどうして、このように多くの模倣追随者を生むのだろうか。どうして偉大な人物は、その背後に付き従う大衆を生むのか。彼らは何一つ要求しない。にもかかわらず彼らは獲得する。彼らは扇動を要しない。彼らはただいればいいのだ。存在自体がすでに呼びかけappelなのである。というのも、この点こそまさに、この第二の道徳の特徴なのである。自然的責務obligation naturelleが圧迫pressionないし後押しpousséeであるのに対して、完全で完成された道徳においては、呼びかけ・招きappelがそこにあるのだ。」（29-30）

(D)「私たちが〔音楽を〕聴いている間は、その音楽が私たちに差し向けてくるものの他は何も欲することができないように感じる。まさにそのようにして私たちは、行動する・行ずるagirのを休んで聴き入るのでないならば、自然に、また不可避的に、行動することになるように思える。音楽が表現するものが歓びであれ、悲しみであれ、憐れみであれ、共感であれ、私たちはそのたびごとに、音楽が表現するそのものとなる。私たちだけがではない。他の多くの人々が、いや、すべての人がそうなっている。音楽が泣いているときには、人類が、全自然が、一緒になって泣いている。真相を言えば、音楽がそうした感情を私たちのうちに引き入れるのではない。音楽はむしろ、私たちの方を感情のうちに引き込むのだ。踊りの輪に通行人を引き込むように。道徳の樹立者たちがすることもこのようなものである。生は、新しいシンフォニーのように、それまで思いもよらなかった感情を彼らの魂に響かせる。彼らは、私たちをも、彼らともどもこの新たな音楽のうちへと入り込ませる。そうして私たちは、その音楽を行動へと移していくのである。」(36)

(E)「[...]そうだとするなら、人間は、生のエランがそこからやって来た方向へと遡って、そのエランを取り戻すことで、失われてしまった〔生への〕信頼感confiance、あるいは反省のせいで揺らいでしまった信頼感を回復すればよいのではないか？　しかしそれができるとしても、それは知性によることではない。少なくとも知性だけによるのではない。知性はむしろ逆の方向に進んでしまおう。知性にはそれ固有の方向付けがある。知性が思弁へと高まるときわれわれに示してくるのはもっぱら諸々の可能性なのである。知性は現実そのものréalitéに触れるものではないのだ。だがわれわれは、知性の周りにはある直観の縁暈が、微かに、消え入りそうになりながらも、残っていることを知っている。それをはっきり捕まえて、強化すること、そしてなによりも、それを行動actionへと完成させることはできないだろうか。というのも、直観というものが純粋なヴィジョンになっているのは、その根源principeが弱まることによってであり、またこう表現してよいなら、直観自体にたいしてなされたある抽象作用によってのことなのだから。」(224)

(F)「自分を牽き拉っしていくことになる奔流に魂の深みで揺さぶられて、魂は自身の上で旋回するのを止める。種と個体とが相互に輪をなして規定し合うようにさせている法則から、一瞬離脱する。魂は、恰も自分に語りかける声を聞いたかのように、立ち止まる。そして魂は身を任せ、真っ直ぐに運ばれていく。魂は自分を動かしている力を直接知覚するわけではないけれども、その力の規定しえない現存を感知する。あるいは象徴的なヴィジョンといったものを通じて感じ取る。すると、なにか巨大な歓喜が押し寄せる。魂が呑み込まれる恍惚esctase、魂が被る脱魂。神ここに在し、魂は神の裡にある。もはや神秘mystèreはない。すべての問題は消滅し、晦冥さは霧消する。これが照明illuminationである。だが、それはどれほどの間のことだろう？　知覚できぬほどのかすかな不安定感inquiétudeが、この恍惚の上を漂っていた。それが降りてきて、影のように魂に取りつく。このことでもう、続く魂の諸状態を見るまでもなく、真正の神秘主義、完全な神秘主義と、それ以前の、これを予感していたにとどまる模倣態、ないし準備態だったものとを区別するのに十分なのだろう。たしかにこの不安定感は、偉大な神秘家の魂は恍惚をその道程の終着点として停止するものでないことを示している。これはたしかに休息である、と言ってよい。ただし、〔機関車〕が圧力〔蒸気圧〕を受けたままで停止している停車場のようなものだ。動力は、新たな発車進行を待機しつつその場で振動を続けている。もっと正確に言おう。神との合一は、どんなに緊密なものであっても、それが全面的でなければ最終的なものではない。思惟と思惟の対象との間には、おそらく、もう距離はない。両者の隔たりを測るものだった、あるいは隔たりそのものだった諸問題はもう消えたのだから。愛する者と愛される者との間の根本的な分離はもうない。神は現前し、歓喜は極み無い。しかし、魂が思惟と情感によって神に没入するとしても、魂の何かが神の外に残っている。それは意志である。つまり、そうした魂がなお行動するとすれば、それは魂だけに由来する行動ということになる。魂の生は、したがって、未だ神的ではないのだ。魂自身、このことを知っている。朧気ながら、その不安を感じている。そしてこの、休息のなかでのざわめきagitationこそ、我々が完全な神秘主義と呼んでいるものの特徴なのである。このざわめきが表現しているのは、エランはもっと遠くまで行くために摑まれていたということである。恍惚はたしかに、直視し感動する能力には関わってはいるけれども、まだ意志が残っているということ、そして意志そのものも、神の裡へと置き戻されねばならないということである。この感情senteimentが魂の全体を占めるまでに拡大するとき、恍惚は去る。魂は再びひとりになり、往々にして孤独感に捉えられるse désole。暫しの間目眩く光明に捉えられていた魂は、いまや闇の中で何も見分けられなくなる。魂は、自分の中で暗々裏に成し遂げられつつある深遠な仕事について気づかない。自分がもうだめになってしまったと感じてしまう。魂は、こうしたことは結局すべてを獲得するためのことなのだとは、まだわからないのである。こうしたものが、偉大な神秘家たちが「暗夜」として語っているものである。そしてこれはおそらく、キリスト教神秘主義にあって最も重要、そうでないとしても最も教育的意義の大きいところである。最後の決定的な段階が、偉大な神秘主義の特徴となることが、こうして準備される。この最後の準備の内実を分析することは不可能である。神秘家自身にとっても、その機序はほとんど見通せない。我々としても、次のように言うに止めておこう。とてつもないエフォートをなすべく構築された、すさまじく頑丈な鋼製のマシンがあるとする。それが、まさに組み立てられつつある時に自己意識をもったなら、おそらくこれと類比的な状態を感じることだろう。マシンの各部品は一つ一つ、最も厳格な試験に付せられる。部品の一部は取り除かれ、別のものに替えられる。するとマシンはそこかしこに欠落感を覚えることだろうし、いたるところに苦痛を感じるだろう。しかしこのまったく表層的な苦痛は次第に深まって、一箇の驚嘆すべき道具となることへの待望と希望へと溶け込んでいくべきものでしかない。神秘的魂l’âme mystiqueは、この道具となることを願うのである。そうした魂は、神が用いるためには十分に純粋でないもの、十分に頑丈かつ柔軟でないものを自らの本体から切り離す。すでに魂は、現前する神を感じてはいた。すでに、象徴的ヴィジョンのうちに神を知覚していると信じていた。すでに、恍惚のうちに、神と合一してさえいた。しかしそうした一切は永続するものではなかった。そうしたすべては観想contemplationでしかなかったからである。行動actionが魂を自分自身へと引き戻し、かくて神からは引き離したのだった。だが今や、神が魂を通して、魂のうちで、働いている。合一は全面的であり、したがって最終的définitiveである。ここに到れば、メカニズムとか道具といった言葉が喚起するイメージはもう捨てた方がいいだろう。これらは、準備作業というものの理解を得るためには役だったかもしれない。が、これらによっては、最終的成果については何もわからないだろう。その成果とは、以後は、魂にとっての、生の満ち溢れだ、と言おう。それは測り知れぬエランである。それは、魂をこの上もなく壮大な企図に向けて投げ放つ抗いえぬ衝迫である。その全能力の静謐な高揚によって、魂の視野は大きく拡がり、魂自身はどんなに弱くとも、力強く事を成し遂げていく。とりわけ、魂は事態を単純に見るようになる。この単純さが魂の言葉において、また行動において際立ってくる。それが複雑な事態の中でも魂を導いていて、魂は事の複雑さに気づいてさえいないかのようである。生まれついての英知、いやむしろ修得された無垢といったものが、こうして、事の始めから、有効な手順を、決定的な行動を、疑問の余地の無い言葉を、そうした魂に教えるのである。とはいえ、努力が、また忍耐や堅忍が無用なわけではない。しかしそれらは自ずから到来する。そうしたものは、働くとともに「働かれる」魂のうちでは、自ずと湧き出てくる。彼にあっては、自由自発が神の行動と合致しているのである。それは巨大なエネルギーを消費させはする。しかしそのエネルギーは必要とされるや直ちに備給される。というのも、このエネルギーのもととなる生命力の湧出は、生そのものの源泉から流れ出てくるのだから。いまやヴィジョンは遠く去った、魂が神性に満たされてしまって以来、神性は魂の外部に現れ出ることもないからだろう。そのような人を、彼がたち交わる多くの人々と本質的に区別するものはもはやなにもないかのごとくである。神に対しては受動的でpatients、人々に対しては能動的に関わるagissants*神の協働者adjutores Dei*のランクにまでその人を引き挙げた変容un changementは、本人だけがわかっている。この高挙から高慢が生まれるようなことは決してない。むしろ反対に、大いなるへりくだりhumilitéの人となる。彼が小さい者humbleにならないわけがあろうか。神との、ひとりとひとりでの、沈黙の語らいの中で、魂全部が融け入るのを感じたあの情動をもって、神のへりくだりとも呼べようものを確証できたのだから。」(243-246)

(G)「この〔神の〕本性natureは、哲学者が神秘主義を定式化しようとするなら、すぐに定義できもしよう。神は愛である。そして愛の対象である。神秘主義の寄与はすべてこのことに存する。この二重の愛について、神秘家が語り終えることはないだろう。彼らの記述に終わりがないのは、記述すべきものが表現不能inexprimableだからである。ただし、彼らの記述がはっきり述べていることがある。それは、神の愛l'amour divinは神に属する何かquelque chose de Dieuではなくして、神自身だということである。この教えにこそ、神を人格une personneとみなしつつも粗雑な擬人神観に陥りたくない哲学者は依拠することになろう。例えば、魂を燃え上がらせてそのすべてを呑みこみその全体を占めてしまうこともある熱狂enthousiasmeを考えてみよう。そのときには、その人の人格la personneはこの情動émotionとひとつになってしまっている。ではあるが、彼はこれほど自分自身であったことはなかった。彼は単純になり、一つになり、強く集中している。さらに彼は、これほどに思惟に満たされていたこともなかった。[...]この知性以下のinfra-intellectuelle情動とは反対に、この〔知性以上supra-intellectuelleの情動〕は意志に依存するものであり続けていた。この情動をとらえるためには、芸術家にはその都度ある種の努力が必要だった。すぐに夜の闇にまぎれてしまう星を見続けるのに似た努力である。この種の情動はおそらく、神秘家にとって神の本質そのものであるところの至上の愛に、はるか遠くからかもしれないが、類似している。いずれにせよ哲学者は、神秘家の直観内容を知性の言葉で表明せんとしてそれに一歩ずつでも肉薄しようとするならば、こうした〔知性以上の〕情動を考察するのでなければならない。」(265-268)

(H)「〔…〕なぜなら我々の身体とは、我々の意識が自らを当て嵌めている物質であるとするなら、身体は我々の意識と拡がりを同じくするはずであり、我々が知覚するすべてを包含するものである。それは星辰までも届いている。しかし、この広大な身体は、その中心を占めているほんの小さな部分がわずかに場を変えるだけで、たえまなく、ときに甚だしく変化する。この内的で中心をなす身体は、相対的に恒常性を保っていて、つねに現前している。たんに現前しているばかりでなく、活動している。我々がこの巨大な身体の他の諸部分を動かしうるのは、この〔中心の〕身体によって、ただこれによってのみである。そして行動こそが肝要なのだから、つまり我々は我々が活動している場所に存在するのだと思われているのだから、人は意識をこの最小の身体のうちに閉じ込めて、広大な身体を無視してしまうのが常である。」(274)

 (I)「〔…〕精神の活動はたしかに物質と混じっているところはある。しかしそれは一部に過ぎない。残りの部分は無意識l’inconscientのなかに留まったままである。身体とはたしかに、我々が行動するための手段であるが、しかし同時に知覚を妨げるものでもある。その役割はどんな場合であれ、有益な行動を成し遂げるところにある。精確に言えば、身体の役割は、現在の状況に光を与えることのなさそうな記憶内容を、そして我々が関わりそうにない諸事物の知覚を、意識から排除するところにある。言うならば、フィルターであり遮蔽膜である。それは、現実化してしまうと行動の妨げになりかねない一切を潜在状態のままに留めておく働きをする。〔…〕身体は我々のために、夢の広大な領野から、現実の心理的生を摘み取ってくるのだ。要するに、我々の脳は我々の表象を産み出すものでも保存するものでもない。行動に資するようなかたちに表象をたんに限定しているにすぎない。それは*生への注意l’attention à la vie*のための機関なのである。しかるに、このことから帰結するのは、人間が行動のためには自然によって隠されたsoustraits à l’action de l’homme諸事物を、人の知覚から切り離すことを機能とする特別な仕組みが、身体のうちにであれ身体が限定している意識のうちにであれ、なければならない、ということである。そうした機構が乱されると、それによって閉ざされたままだった門がすこし開く。なにかが、おそらくは「あの世au-delà」でもあろうなんらかの「外部en dehors」から入ってくる。それは、「心霊科学」が研究している超常知覚に類するものである。〔…〕」(335-336)

(J)「このようにして我々に届けられるかもしれない情報はおそらく、魂の下級部分に、霊性の最下層に関するものでしかないでもあろう。だがそれでも、人類の大多数に見いだせるもののほとんどの場合は言葉だけで抽象的で実効性を欠いているように見える来世への信仰を、生き生きした現実的なリアリティréalité vivanteへと変えるには、これ以上のことは必要ないだろう。〔…〕」(337-338)